○う津保物語

祭の使

九
さかのゐん
並三

特別
へ12
4327
9

176

タレサク卅一ロ
サハヤケノシル卅四オ
シコフチニフルメキタル廿九モヨ
ナカモチノカラヒツ。ハユル
ワケケ三十五ユ 今十四 廿一上一

近衛ヲモ…ニシカ可…

かくてこのまつりのつかひつかうまつらせ給ふ。〔左大将正頼〕
舞人はうされつかさは中将兼くらつかされ役よ〔近カ〕〔助純〕〔内蔵寮〕
いくられけるもさうゆきまさ。むまつかされ役よ〔中将行正〕〔馬寮〕
い式部卿の宮のすれ兼とつくまう給。ひろし乃〔しきぶきやう〕
物くの三所のつかひをいとさるまいてしまふみな〔正頼〕
いくつら給よらく物くつかひの中将かくしそま
つら給ふとて
やさんなうやうこゝろえて物兼さうむ〔正頼〕
まく兼よろれ。つかひの中将〔助純〕
まうされいますれるへのもふまうやうえとお
きうとて人のらうん。とく給よろつうなく〔仲忠〕〔兼雅〕

門 へ13
号 4327
巻 9
昭和廿四年四月一日 高田早苗 寄贈

将ぬしよりは御むまあまた川口よりつかうまつる
はなやかなる御むまども。くらおき人えもいはぬ
さうぞくどもして物をきせて。くらの鞍よりはじめ
つくりを付てかざりたるは。いかにぞへいてあるじ
して
かくしよう袖のぬるくはなて波のうへに
さしよりてうけ給ふ。これよりもあやしきものゝまへ
まゐりつゐの君かくしたまふ
かくてそのれうにつかうまつるはあまたふ日にも
これが馬のさしてまかなひはたちまちにむまやぐらにて
ていくさら給ぬ。ゆかしさやつゐの君みえ給ひぬとて。

から御十まりあまりいそくらるゝ給ぬ。大将殿の御かた
北のたいにはつゐにあまたつらなり。おんまよりみくらまへ
みんなめいつくされば宮の御方にはせちにとりしかる
からあらず。ゆかしきさまとひきゐてわかうども
ありける二てうのゆかりよりの大車と
ともに乗て。殿のゆかりん車とまた車しりたちて
ともそへつゝ。宮の御中にもかしこしとておほかる
くてこのゆかりのしてかり給つるに装束よそほひとて
みえけり
と御年よりつかへまつりのかりやうかなと思ひ川
つれなき御いはひとりくし給

まいの宰相はやまひいたりよまさりてそのことは
さくらん、花ちらむとわの袖をそへて、ほうせしかば、
せちよのことをおもひきれはちりぬるよらにてたと
とひゝせこそてまつり、ねいたせてまつりあそりろ
と思ふくよはかりいつりて年ごろもまたりのゆゑ
え得とうくなましらり
わく山のみすきそて時鳥なく得えかなしそ
あきさつなむ。わか君やりそへ給ふ。今はえまうしまれ
おしうこそ。いそきぬれなくなりしかり。わそ家
家ゝかうねしちとるる郭公とれはくら
ぬ年ともありけり。兵部卿の宮より

めつらしきゆくいそみのかなかてまくらんてなけ
こそきかのえきとつらめとゝおもて　あて宮
あさ人のいふよつもくそなてしかもうらをしらむ
とおもひはしらすて。平中納言
いかにてもなほしらさ物なけ付る身とこのむ
れいとくさくされ。あて宮
ひとすぢに線このあさや付る身とこの花
れさくもさかん。すゝしくきこえの身よくされ
つけくしそまつる
ふゆのこれ露のときわかるゝもひなしき
かのとえるうらひしき。おもしていかなんとふるえ

とらへ。あて宮
こゝのへにをふるあれつきにとむそもわかれま
川さえ人をとこそみるとてあふりなんことゝそみく
ことゝしてまつりそのふみのふさあけれ君なれ清
りとしらい。さくとあふはまる線人さへさうろしも世さ
まてはいは川にをあす出ると。されはおつきかまに
うとあらふ。はしうしてうくしてしふそてまつる
はりつかいつくさくるを待くるねのまへをも
ふしとあまくなるらん。川はわさましくなひむと
しましまつり。大将のあらくみ給て。それいはまへのしか
人はそそあらんめまし。かんさらめるなるらめへくしこまする

めづらしくゆくてみのなかてよらむてかは
こそきのえこそつらむとゝあて宮
おとゞのむすめつかさそなへてもうちへ
もゆりいらへてかく。平中納言
いつそもとろしさ物はいづる男とこの心
れいとゞさくられ。あて宮
なほすれとなほのあかやはる男とこの花
れさくもあらん。おもてくろきこの男よくされ
つけくしそてまつる
ちとのそれ家子のときみわたるをともおもしろく
そのとえつかさむしま。きよしていかなるんとゝこそえ

ちかくあて宮
このもあたるすれつねにもえともわたれま
かきと人をとてそみまとも。えふかりたんとこそふく
ことかへまつりこのうふのふきあけれ君れ所
りとうら。いかくとちいきる紙人さへうらこそせ
ち人まへ。ち川んをもすく出月こそれいおのつがなかに
ことあなに。ちしつてりくゆめしきそてまつる
おりつつないかくちくるるをはくるねのこぼる
なしとなすそくなかるん。川いわさましくかひと
ゆめしまうり。大将のゆきくみ給て。ちてはまたのしな
人はこそあかんめる。かんさらめよかりめくさ君な

契云拾遺集恵慶

あやしれ

見れはつまなくなひくなしろなきかうしなを
のたまひて御色しるし。三月ばかり
おりめすりころもき達ぶりもたちて月日
のかみ神はぬ達なりと思ひてまうのを取し。
おかしう
思ふらしなきてこそ祈かくくるしめなうしなく
さしもとつきなむ。ゆきは梅を
いかにもいへぬ人はつくりて世をひたるなら
弟をそうしむかへととおもしまつり。又月又日清らを見
てまうくゐろき緑氏又。御服のきみさて給
涼川みえかのおやなもく時かへしまぬ緑の

あくつりくれとさこてまくと御文をかりをて御給
の君うくわかりしなうとぞもえ給くなかれはとうし
かやまてもれとも見てまうひ無手まてえあなは
されはこそあるみくともひ給ひくここ中達とて
かう思しきんとい人のきみくをあくぬ氏。
いうしうてそかつきれとならく御人給へはあく
えやしらつくひきひくなくなきへの給ひされ
とおもしろぞなとのくまふくてそのひれ御せる
くらえ御座あなふくの文氏よみてられなり。
女君こころざくはあやしのなうれ由くまうれ
いせれくさこのおくはされうき御もてなく取の

れう人はいやましくやましろれなきあまたこれなくれは
まへはいふかひなのこけ、ゆたくきこえられ給ふまへ
よいひせんのとも、つかんしなきりよりゆへきなきと
とめくらまでら、北東日よめくまいみしろ
めくくはいつきのうゑせんりしれなきさんくらつ、
まいひろごとして二十人のわらはへさんくら、ならく
さうぞく、かみうるはしくおはらかなくあくやうたる、
おとな人さうしいゑひしてかく人、いとそこくおはま
へりさつゝお、あの女れうへのさぬまへれしまへ
なかうるいゝとよ、あやうそねけしきひしうたてれ、
まつりはみかしのやまへにまつりきんま

さいふ人のさうしのせいらして、まうあつくほうし渡
とうほ、舞人のさうちさんさし、けたくれゆきに参
らで、舞踏しうりてゆくさんへらく
おりもまへとくにまうりまちうちてはやくへらく
ばさちと出て、むまば池のかたよりみやにより
しおんりしとて、ゐさらのかりよりにとも
おりくて、みなみのをつくとも、いてくそうそせ
まちよ、すのはしをんしもとて、さりちらそ
みなくめりさうはくそくして、御くるまにかりみなき
ひかせてまゐりつゝ、ゆのこしもとのりく
ちりみなくのさきまい、御むことゝもゆきのした

とりゑんしつゝこそ侍れ。これ御むまとも出す
しくわはつかひて、うしくわやとの侍く。一番
に左近衛のたいふあれ、出しくしく侍。出しくし侍。二番
にうちみてあるしのむくくし侍。三番に
のみて左近のえどくし侍。四番にのみこ左兵衛
つがひてまゐらし侍。五番に右兵衛藤原
くし侍。六番に右近の次官大夫辨にくし侍。七番
に左近衛の中将左兵衛佐のさえもんの尉くし侍。八番に
左兵衛佐右兵衛少輔をうけ、九に左兵衛督侍くし侍。
十番に右衛門の尉右兵衛尉に尉侍くわうくれにつゝく。
厩左馬のむまつかさのもんけうし侍。おもとれつゝき

打毬 西宮記五月六日儀
打毬者四十人云々 大
臣投球 随則争打
云々 衣冠如唐人云々

道九日志らハ十二等

ねてなりつゝ人々これをみ御まゐりて御むまとも
わしうまはらんとしてはしまりとはいりてくわらう
ぬるこゝろよしたるも中将少将もかはりて
しらかきてまゐりとりつゝたまふ物わかせ
らもまゐりておほせありつゝはしりて
わをとりとらせてくはしめくつかふ中か
将むまかれまゐりつゝむまつくされはしむ
よたとのせうまつりまゐりくをはりてつくしゆみ
つくりつかひまゐりてとりてともこまかき
つくしむおそふもあかしのはしりはしいるうまさと
とゆみとものまへにたまはりつゝりとりとる

騎射 西宮記五月六日

うちやう帳をもちてあそひてうちゑくいはひあそふ。
れはまとも、いけふひろくてひやしまくさかひのを
もろふなかねのゑしてつくりほんとく、むまふ
つひまつりまうところ敷りたうゑのむまつくさ
てぬところしらて。興あるところをみえてむかう
つゝりをもちよりちゝし光くゝりのみやうまてたの
ちさうつさひきみくらもてうちし匠らし光ゝくる
まのりて大将のはめし東れさえよこまつこまい
せてあそひてへ挿しふまふと大将のみちくさうめ
しうされつきゝうくゝろちくきこゆうかみたもて
えんかうよこそわかれぬやうしれとのうわうくれ

のふかれくゝうせちうかんしえやとねれなかふ。
こしらくのはつらう大将殿めくのなとのむまつかさ。
ひさつまそかりてまんたらうこうし。めくしせちう
興しあろこしられそて。御ちしれをしてゝふむ
もひされ。御そ冠しをりつゝひきくさそれれ
ふえとりて左近のたれむまつきさひまて、うたりう
くあそひくいてまふ。たうをたれむまつゝさゝえてき
てくる。世ちね。あそひく右えへく、見ろくしえ
右衛門よりくさうちたる大将さうら右近衛つう
さむまつゝきとひさくあそひて。殿人うえ給ゆふ
うきせうかうしとうおうかう。かんりしのこえうしら。

れのつきみしのをしうらたれつきさもらしくわ
らせくれありけるて、右車しさよはきけぬ、御まへ
ことよはつく忠まかりぬ。かくきそしまら、わかむ
ちかくさせぬ。かうことゝもりまうて給てそよ
へきなりけりきこんなるとて、右近わたくへ人をして、
ききこれよ右大将のふくろかる。うくえてさなる
とをふくひよするむはしれちれ、おうきれとのさふ
れしとうしまうて、物せんと史えけつまいかとら
れ給らうち川ひとくひよ女のまそひもとく
あくう里ちう海そくくやからきこたね入く、
うくそくもあらぬなんのとりくさりとて、かをて

十二つきうく 一本十ふつ 紺本同みて

まうれたり。えもいはずつくされぬ。三百のよそひ
ありのみさせ。つかこのほどそなはりつれぐらん
たのれにて物さ川十二つきうく。大将みなそてまうり
給ひんとものは。殿上人ひとりもなし。そして今まゐ
てありつるものことをれめにこへいよそろうなみとをも
へあかれ車ふくあつるとの給ぐらん、丸宗
の御ゆるさせめて、大将殿ようくびつるほ
まゐらせくえりのせきるを、あそびれて
るに宮ひかよとるむ、女さいつくりのなへとをとり
くいるつまうなるあそびりのそしてんとみ
ころよりせく、物をまでよとて。うつるをはく

うきつき給

こころをえかはいよいよあはれとおほえふかくやと

えりなき殿上を居かゝるかとてつかうまつりそよれなお

とく平中納言殿よへまゐりてさふらひ給と大将の殿

そんなふうつくしき物すりとのたまひりにけり

いかんとうくしてかくて給へとれつつひのれくゝんふそ

かうれあふきのよりそつ給く大将殿よさるよゐ

おもくれうつくしきさん給くいかろさりしこまでゐと

ノしのくらんとうしよこくたまそてふさし

てかやならさうきまなくりしこまり給

雲みまち若さこて玉とかよいうまくもつる人

そんゆきあさかなとそうせさ給へなうくんかへりて。

これかれかく平中納言つかうまつりて給ふとそ里

給つるを。御をんのはさいすりとをしろ為家にそう

ときふくれつるにゆくろさ見給。右の中く或

つのみことくつれおほ給。なれゆくそられるふ

うとてのさりてつかまね。おもくいてもこうてく

あくくありぬるにもさうおつしやうにすとるむに

のゆくをさうちふとまうりて。とまそてさくてひつ

かと。ほろんのうく為家のむかろさ。給ひつくれらう

しそうしつまつへゆるうせ給くらん人そてかう

給つさうよきうまれと給ふれつれいかその給。あうし

うきつの語

さしつきれ多かしこまれと給ひふすくやと

うりの絃に琴をとり寄せてつかうまつりつとよんたか

とて宰中納言殿より今まてさかつきとり給ひと大将の給

さんさふらうつくへきものなりと給へりうこえり

かうんこえへしてかくて給ふれいつものかくらくあそ

まつれのふえのをかそてつかうまつりく大将殿よりさかつ

持ちくれうつくしきかん給ふかうさらさ一このさま給ひと

ノーのかうへとつてよきくれあそふかうし

てかやうらさうつきまくりしこまりけり給

雲みまち声鼓て遊を納よいまつくきうかへ

そんゆきあそはさてそうせさ給ふくらんひきかへて

おほんまへ宰中納言つかう給ひとて

給ひて御きんのはさみすりとりしう大将殿へ

とを給ひくれつまかきうさ見給ふ大の御子こそ

はのみこくつれおほと給ひおほんかくこちれるすふ

うとてのあらてつかまつねかくいとおもしろく

おもしろうあそひたまふかうつへしたうとるよ

のかくきこえさせたまふてとよまてさしつくひつ

家とはうくへのく大将のむすめさま給ふつうれよう

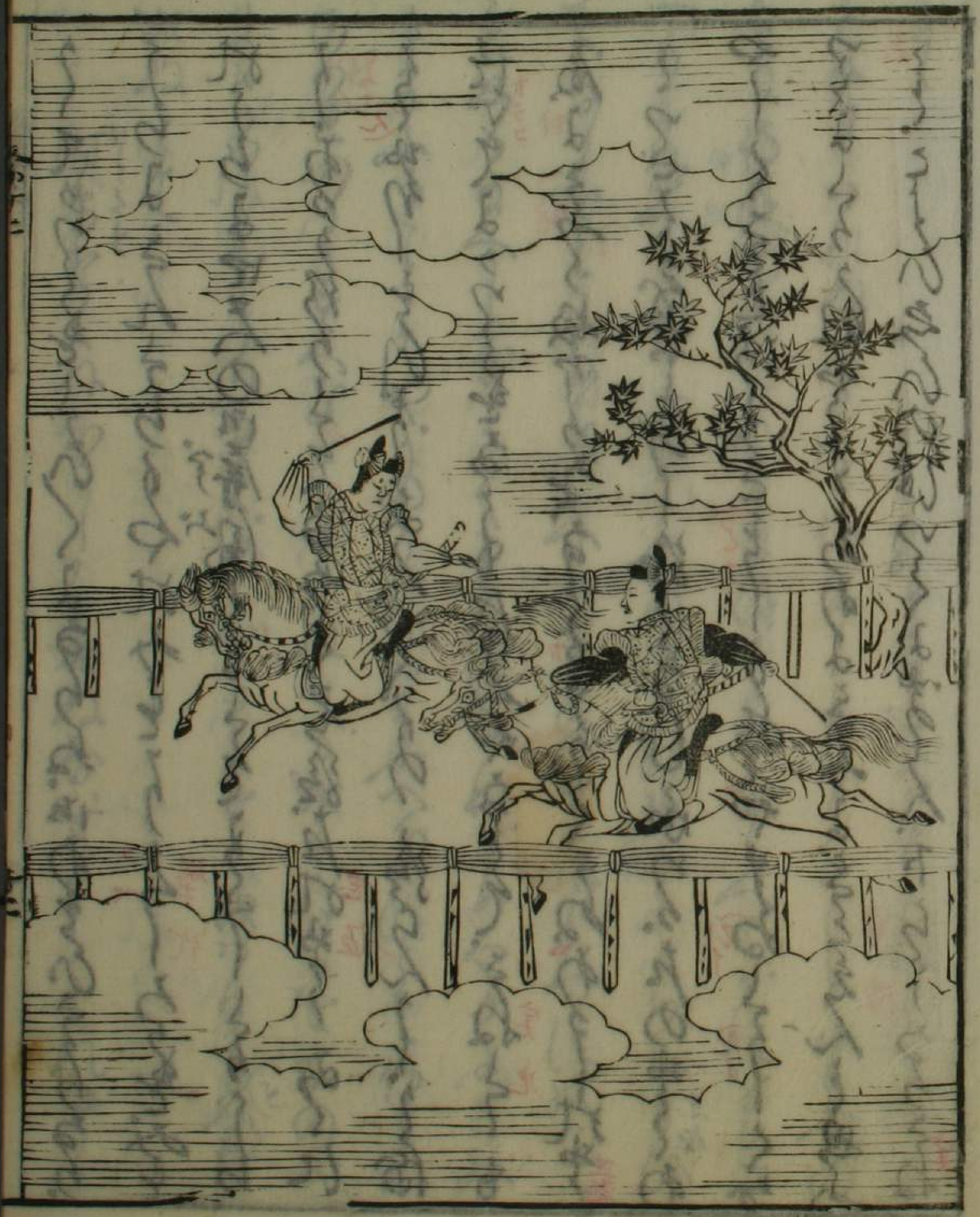
よそへてつまつくんかくうせ給ふくらくんてそかまう

給へさまにまうれと給へつれいまうの給ふあて

一本尉 一本將監

のやく杖うしとかう給ぐてひくら太れむまつき
源むまたゝゝ翁三うみえくおかりしまんりんさちめ
みこたちくとまれくらくゝ給ふたぬくあらしまはは
太らのせうもらしめくすのみやすくいらゆら
とえらひ太ののりしきハ右近乃衛まうくえらひ
みしそんうしあるらいひてむまつるさつかよるこそうら
ゆわんさいすけよりしうろこそらうまりこそうハれ
まへよむさくむまうしもむすそめすくびすか
くうらけ不ぬきこれ中のことゝよりしくらみこ
れいそうのかみのとゝとやらうらうこれ源まへよ
あくりてハ右大衆のせうしまうそつし先くま文れうらうれ

かくてこゝたとおもひきこえくひくぐさらしきと
ゆるくとりしうら、みなめてつくねくくらすらの
かり、あさゆひくみなひさきくて、左大臣殿しくて
うらまをうらくのすひをて、あ中楽のきうむまいりの
つらくらちよむれくむまれ音声給ぐらこそて八
ゐすうつはぐく太ろうしてきひきをはりいら
なは源むきれうりよりたろうゐてひくうりろ
太らうすこ九りへ八太らりいへ九らうちまさちく
すうしうまれとうれ右よハやづうこ人らちかさ
たとりハ中将しきいらうれむまとちよそと
のこをれつらくいてきそうしよらそし先く太鼓をそ



給ふ。御まへ〳〵ひきくらへしとなほそう
らこあられく。たけをまへね

かくてかくをしらひくよろこひぬ。御あそひさらなり。
からはきんさうかりやれみなとりしろかねをみかき
れいはは四尺の御屏風ともそてしらしら
りあるかきりしてすゑわたしたる。かみたちは。うらに
そえ姫君の御ほとりにいくつもりくりの絵をかしらんしり給へ
はいてよかりつきはみなもれゆくへやなとて。さねたゝも
御まへよつれゆかうちときかうくこえぬ。あてきれ
とてさかみのへ給へるむすめつかたのゆへあ
やしくさふらふをこいしのおにやまれゆくかく
まうなかれあるよこえてとえんと思ふ
こゝとひたひのはいてくゆゆのそん。下らくみちの宮ね

下ラウノ実忠ヲ可ヽラハス匕
フモキコエズ又氣頼ナメリ

くとそれたらうらう給めなとさるはうねよりなるう
とかしいれぬ。あやしく侍なりよらぬさしとかりふかの
かうの仲純のあそんりやうしみそてかれそとう
つりゝ給へと中しよりふ。あつし正頼かうらしひ
て。あつもをよふのそへるこゝそむよ。いしろはなれて
ともつのくしかまふこそはおとれ。かめやりよさ思
まゝふろしてや。おのれえのふへまひそ侍ぬ。
はるといつをへまさえれかもかゝりけりをたのお
きかうきをとりのく。いそやうき夜かりて大殿
かぬよそ
かくてあたるたくねおもしく御ぬなとさうされなう

かくてかくきこしめしよろこびぬ。かのあそびさうらう。
うちよりきんきうりやれみなとりくてるをみを
れうらは四尺の屏風ともそてうちうら
りあるうちとてうかくえ給ひたれけるへなくに
ちけりもいけりなんくりの給らんしうる
ほいそよりつくるきなるもたへやるとて。さねたゞも
あはさるぬかりかを。すこしかうくこぬ。あてしれける
とてさるまのし給ふまじぬつかたのけるくあ
やしくことほしことしのみてやけるしくな
まうよろうれやしろあはこみえさえんと思ふ
こし。こよひのはいくよけのん。下らくかうさね

くゝまされ。さうしくうせ給めるなとさるまてとうねよりたう
も見えいれぬ。あかしき侍るうよらうしきしとけりふその
なかう。侍従のあそんなりける。しるなとへて。かれまとう
つりき給へと申して。あてふ。あるしれけくうらうへひ
て。なかうもとよるのもとへこゝえむよい。しるうはれこと
もおもひかまへしかやまくこそ。たなれりけれやうなさ思
まゐふるこしそや。よのかれ見まふへなひとそ侍らぬ。
いとくまへよさこえれみもぬけりけかとかのお
まくらくきもりのあく。いそやうときゝ夜ひかりてなん
ぬぬよそて
河なるなくねならくしくぬぬなとさゝんれかう

いくまでうちそへ、あやしのやく
おほくみこそ花ざかりなるよやかれそそただ給
さまざまれとともにありさまの思ひしらずば[illegible]なるやうな
とて、秋ひとよあそびあかして、うんさちめでたくらく
りいは女のまそはい一くさり、御手のうへ左大中納言まで
それよりさまざまに上らつまじきよそへて給
はべらぬ。まうけの人々うちつくさの御ことも物
のまじかりつりなしに、あそびあかして給
しめてそ人つま給うるうれに書家[illegible]らえ
まつり
意のみ人の家く舞ふ所あるこれさまぞれを

初句將不忌ノ義ナラン
コレナリ

ともあへなん、給はくもやとおもはれまじや、なつかしく
ときめかしまつり、おほくの
こそまさんとそくるさまざまれよそまれ書あ
しみとおもふるれ、なるけのみて
しかよのこ思はるれ家山の木のすゑかけ
さいつゝうちまれ、左大将殿より
まひそてなほふれぞるもなまれども秋成
の夜いとよくもあかられ、中納言殿より
まひぬれいさ月夜のあふちてふ花の色
まづよろこびと思ふは源宰相
ふかくぬるなみそなまれ深川ながれても物

いくまてそ。あはれのやく
れくみとて花をちらすよやられたそたゞ紙
さもられもとれハおりてくさ。思ひしや人にけ紙そやる
とそ。兵衛ひとよあそひあしてうんちめえとそら
りハ女のまそひ一くそり。此中のとをたな中納言そて
それよりをとを。をくつまくろまし家よそへて紙
右の中ぬ。左右近の人りしむさつくとのゆのくとも也
ろ申しはおうしむねさうするにあをひあつてけ
とめてそへつを紙そうけれに表をあしりうくさらん
まうり
音あるをも人のかく乗そ付るこれをさされを

ことあへなん。称ちくもゆとりされとや。かな紙そやく
をとゆめしまつりあく文
そさうんとそくるまもそうれよそれ手あ
しみとあつとふすれ。ある心のみて
あらよのと思ますれ京山の前を死たけ
さい象ておきれ。右大将為たり
まひろてなふれとろへもるまれとも祝家
の夜へとよくもあくれ。中納言為たり
さひぬれいさ月にむつあふちて小花乃為
まうよてくと思へハ源実忠
ゆけとめうみてそまそ出れ歌川られても也

キノ国涼カ

とかりひきならすかのしらべよたえだえもかりなは給
つゝ、ゐざりいれむすめしぬかどこそいみじかりけれ
ましまつり、あはれとも給へと、仲忠がしつらひみそ
君のあそびのさうらふもろこし物語りうら
あてなるふもあらぬ、されくふかう
いつこともなくこゑして雲のうへにいとさこひはひや
かなへのあはれにそよそ、藤侍従の月のつきかり
れ目くらかうあからぬ花のこよなくうれつきしく
仲忠
きこえけれのみかどの月よりもあらぬまいゝも絵
おもしろいかくそそおりふさうれのたくるもかそあ
しくあはれ、藤侍従の君

仲頼
うらし山しやうくさやまがもしやなきへぬるよ
そまひしうきを少将
たちあへて侍ゝふるとしきらむいつぬよ
そしたちみしやなからむしらうすきを
行正
山も雅もえけくあれとも我やしかさこと
のまれぬきとあられ、あろかりこ月の出あひ
ふをたかりぬ、人ねいかゝきまちくちふくなく
岸
らくしふくかひたら、あのゝ人よえところ入るとし
中島
きらあらしきた、ところへあよれそちをくちこしか
あきまゐりかく、いかにきうつゝあけりれてたり
しらしかねとも世かりて、されてときこしあやさ日さ

とかりひきうつみ。かたのひかりもよそにもかりかへし給
つとめてなかしれむすかしうぬかぬかとこそいふみえ給ふ
まうしまつり。あはれなる給へし。これもあつまる御みこと
君かうあつかひこゝろもあるまし物語涵りうち
あそうふもあうられ。まれくふらう
いつところにちる雲のほかしさいひや
みかのあれふそきみう。藤侍従の月のてうら
此目くらさらぬ花のとようくうれつまく
仲忠
まちられのみち行さ月よくらぬ夜はゝれを
あうしといふくそかりふさうれのおくるもゆきそろ
まくらん。藤侍従の君

仲純
うらら山しやうとくりとめ夜ひしや来ぬを
そもひしくうきく
少将
たかめつくの心ふくるしうらむはつねよ
そくたうみるやたちゐるむらうすきを
行正
山も雅とゝけくあれとも秋やひやうこと
のうれなとゝもあらそれかりうち月の比あひ
みをたちぬ。又ねいゝきるらくふくみくれく
うくしふくかひうら。あのひくまえさうし入なとし
岸
中島
さうふりけれにくそうしゝかりよれそなかこゝろしか
ゐまよりきく。いかしさつる藤はらうされてたり
しまこふねとも出られて来てこし。あり川き日さ

式アル夕ツ

侍従君ハ仲忠ナラン

右大トノハ忠雅ナルヘシ

かくてみな人々まゐりたまふ。十二日には御前の
みくしまゐり御むかへ、つりどののみくしあげたまふに
せんざい人々あそびたまふ。さるべきみなさぶらひ給ふ
ところどころにつかうまつりて、つかうまつりたまふ
さらなるべし。そらかく、ひきものみなくれなゐにふさ
かくさつきたまふ。式部卿の宮のゝちにもはべりて、さし
つかへたまふ
えんのけしきをみて、おもしろきこゝろばへに、人をも
そのをりの事も、吹きつゝ、侍従の君して、そこは
さくらみこゝろくばりたまふ、右大とののみこそ
ものせられたまふ

十カノ宮タツ

民アルイハ実雅カ

こゝろよきかくふく風もいとはしたまはず
えもいはぬことゞもおほかり。つかうまつりたまふと
てたてまつり、大のおとゞ、おもしろきことよりこそ
まゐれ給ふ
風にさそはれてみえたまふ。をりをりのあそびを
かきあらはしつゝ、のちのちまでみなもてあそびつゝ
式部卿の宮よりたてまつれたまふ
こゝろばへまさりておもしろし。松の根より
ゆひしたまふにつけても、式部卿の宮
大きおとゞ、ひとつてこそ風の音くこゝろと
ふしぎなりけるに、源実雅こそかの中納言雅永

右大トノハ忠雅ナルヘシ

或アルニタツ

かくて六人ながらみなまゐりぬ。十二日に夜の御
みくしあげの夜なれど、つかさのみくるまたてま
せさせたまへる。おほん人々ことのほかに装束ども
ところどころにかきつけて、つかさのよりこそありけれ。君
たちなどみなしりぞきてひたすらに、御くれなゐの扇
かざしつゝ、成親卿の女房なるおはすらんとてさし
つかはす。

そのあけぼのつとめてぞめでたくまゐるなる人々
かゝるものをもとめて咲くやうに、御心のまゝにしてそなた
さるみこのうちかくうれしと覚えたてまつるものぞかし。その
ゆかしさまさる

こゝろにさそひて咲かん風ならでもうらやまし
えこそはなれぬそらのくもゐのうちにたちまじりて
たてまつれるそのことの葉をかしくおぼえけれ
まゐれる

風にさそはれてみるこゝろもあかずおぼゆれ
かきとめぬその心のうちもみえてかくはべりつ
き。成親卿よろしくまゐれるまで
こゝろにかゝる身のおとしも松の根より
かひなきにあらず。成親卿
太政大臣のいひつゝ、風の音にこそ

こゝろのうちの、成親卿
雅永
源実雅
扇

宝忠カ

タツ

我等のむらちせのうきをへりもとして松風のを
とをくしくるむ、岩窟桐殿
やうなるそうみとせれうきのうれしさいりつと
もるうきれ松のうきうハ中ね
むとこしれちせれうきをとそふつ松いくようれ
まつらもちいすうらん、おとしてそれさりれ給くなう
とろうおりしハつるとのまつて給ぬ、女君うちも
いくらきち給へとこえてまへハ御車にとして山ね
ゆみくをへてわてら給ぬ、しるみいとつる庵して
ゆつてうれそうちもうるうかやまみとうきをはさ憐
よそもうて君よりかりてますのこゆかんきち

胡瓶
故瑤 一本胡桃
絆本同

めみとうちおりまりて、女君ようちゆかみとくくをも
うれ給ひ也せ、地をと君よりち、宿えとをとふれくあへ
せひそ流ことをへこさせられ給よありをそくあそえ
し、御ゆへの里にあとゆろ、ゆろりしてにいあ
とくせられひしゆかさる机ふうふよりいそさ
せいうめしき山めくひかりとるうしまうりなか
いそく花りしき琵琶ともあるよひろむさうくかとし
てもくこあそひ給く

我宿のむらさきのかきへもおしなへて松風のこ
ゑをしらるらむ。箏寧桐殿
ゆかりをかけたまへるをのこさいかりと
いふきゝ松のかきりハ中ね
あともしらせたるをとふ松のしたかけくるれ
まつかひはくるんをとこそあはれなるとも
そのかみのつまとのよまうて給ぬ。女君たちも
のゝ音ともえらしとこそ。まへの御車こそしてふね
あそひをとゝめてわたり給ぬ。みかしにつるまうた
はつるれうらこゑそかやみなかきほさ嫌
えそえてうつしつかりてきすのこゑかんきゝら

めでたきおりしもあれ。女君たちかけかしこまり
かれは組せ。琴の君たち。あいとともにふれくあへ
せ。ひと琵琶しきへくこせかれてふよあり。きくあそん
し。御まへのたえにあそはむ。うちかへて。こいのなり
とくせきれひしかわさる魚ふなとりそさ
せいかめしき山めくひかりなところしまいりある
いそく花をしき瓶鵜ともなるよひろおほくなとし
てあそこあそひ給く

胡瓶なるへし 俗
故紛一本胡瓶 總甲入
緋本同

あるじのおとゞまうけはうにこのとのゝめくもひく
まかなひかうくしや、あるじにハ仲純もひやゝ
させし。ふかきちぎりあるひとへのしあるおりと
もくさぬ国ぞよれるとのこまへハかゝるえてのと
まひつかうまつれハ、三所おりしあそびへ人といふそ
ありけるくづりとのへまうつおとしのみくまろき
おやのかかんそめさて、さうまのすふそて
ありけ池のそこよかゝへつてひしつらしそふら
人のしるもかそすろ。仲忠
そこふかくかひきろ物ぞあやしくと人なろ
このおやとみるかなしてかかしやうしたろはそぬる

てまうちきみの御ゆへなれハくらつかひしてかの
れ給ふもしうれしきにて、おほかりしかハかの
おのゝみやうくおとゞ侍従のみやく、ことしれとこふかくおもひ
らん
これのことしを物語ともすれハかくれなき
ひくねさとさう事なれとはかなきことにあそ
さふらふ人のけしきに
かゝみのつねよりくるしけり給ふことなかく
すくれても侍くなんすゝのおふくれしりつかひなる
侍らへ今日ハなくなくみせんしまりとをふなくあらむ
ゆかりのかたちゆかしものせられつつかきりなくなきつゝのるのかり

て、まうとさまうりてなんとそてきこしめすめくてあるし
の御かた弁のおとゞのせんしきえかくさかりく
ならぬかくまいりてまつらしくれんとこそ
とあられよ弁君なんかよハなくてをとるむね
大将殿のさまへ給へるつのこまかりけむ、めくらる
なむかへしつきられて、御めくりて侍らさ侍るんりしら
れ給のことをそかく侍らて世給をとく所望、家く
の中のこととよつきしくあるなく殿のさへとし
て、ふしられをゆかしいくらるゝ、ときの朝ハなにはくてせ
給めまいハえしつめん人のさうことするハいらふ
あつさくふりのかたりまうしあみなみをしこゝれ御方や姫

のこハ物あそびのまうけ所よりもあまた人のたまふ
よつきくえあしよ。みこたちへさしわ。かうらきくら
まゐりまふたちよ。左大将仲頼ひとへとくやうくり
てわたりまへしこそ。あかりくてみをしか。その中に
も仲頼なをえすまひくて。さハとりしき女のこの
これよりかしくみよの仲よりくてらすちらうこ
くよくりの仲頼とらくしよさうり給くなみそかもく
みよハ出ふ夜ハさりつゝ琴のひ給ハらんせさ給へ
さ河とをや。きみたよのかよさうりの夜やそもさ給へ、文
人くもくみ給つれハらかくくなせとて
えことりわかそや風の吹つゝ人ともこれ給ぬ

へたくもの給ひ。給く
れく山よ松の音をねとのうしてハきさしにすひ
くそらひるゐつゝ。うちそゝ給くうし十七日よりかむ。を
へきそれもつ声をさせまへ。文よりしらんとそ
よくらぬ。物よし左大将のめくしそうくらんれそ
給しうるれるを。すくて給よへくをつくりせるる所
夜もおやそれよりさいはひとれんやみのこの給へくて
琴ふくくよつく。立給人。交女房の君。あるこのよこ
の方よりもちかうそへやりうて。たれの人ハあとらるハ
それらきこえるくハあるこのひ物のむしこそちらむとを
物心もゝもの。とゝハ物とれらむハあり文よするあひ

さへかかへ一本さへかへ
一本さいはら
紺本サイハラカト注ス

かく御かみこれこあをいろ〳〵あさあひしまう人ひ
わきなどさまへはら海なちうらうし宮のあ位
うちはしらをしてゐはくはよつく給ふさうれさうにさ
しそ一の車うら人みなむき出てさひい乃御車
よつてそてしかうしの御さいしらはおほり給て出る人
そうし色つかうかうつるぬみかうくれかしへむかひうつ
わうへつかうつき右近のそうまうさいたえつかうる太
近将をうちかうまさ御ちうつまえつうかうる人さ右近衛
将そうしときさうきさ出漢をくこつかうまうつきさ殿上人の
まうとの上にもみな出てつきらうんもうらめみを
さうら出るりかさへいうく給ふ殿上人のうらうす出頃う

まちかうしめぐしひとくまてもまうられうかつをき
らしまうふ御うちくをりかうかりうれは左大将のぬ
しらいのあをきしらうかりしきこふのきぞしあかさ
まみつくうちうく御くうをかつきうのやどきとふあるを
さくいけてかつりぞとうちうく御給にまのぞくせさ
せくらうらう給ふ右大将出そくうら右すくうちらひ
給ふくかいつるま右のつくひ河河そひと殿上人さ
むかうらかうりつくあそひてまうら給とそ出わさ
そのさゆしいふこ給ふうにうこうてひまふ
そこふかれふらをさるうはみすれさ殿すれ出
も人やつくらん左大ねのめしかせれうさのこいふ

まに
人かくきこえ給ふ御かたちよりは八ゆきとを
ひきとゞめ給へとてまゐりてひきなあそひて
つかうまつり給ふ。ぬしのみこともおかしうおぼし
よろこび給ふかくて、まうのぼりたまひて
いへしてたまへ、はゝ人よつきたまふおはしまし
きこえより給ふ人をはつかひてたてまつり
うらみくらなはつまうすれはおほのの
こそともいはすなりぬ。あやしき
おほきのおほんきこえつかはしたまふ
ぬ人とゝしとて、そのおほんはなもみてとゞめ

あんと思ひて、はつかしきことおほかれは、いとどま
さりてゆかしくなれはこそ、いとゞみをおもそ、いとゆかしの
御心まうけともしてさふらひて、はらへのよろこひの
たまふとおもほして、いかなるにかうよ
まゐりのちにいふに、たまひてあそはしてそ
あるほとに中納言、かたちよりはかくれまさるに
ひとのこころにもおほえしもかれは、みの
くよみせたまふて、いとゞおほしたる
されはぬひとのこしまたあると、おほやけ仲忠
はきのうちよきすゝみて、そのとものよ
いかなるよ、おほせてゆかしさるに

礫瓦

仲忠 かく人多かれ思ふのこゝろねたや思ひ中より
見れ侍らん。うちひとりかへしいふとてもそのまゝ
れしのいへ

そこともなく石をとりて引あはせてとこれ
とも物の具からうとしふかくれ忠いの宰相実忠
の見れりしよりふるさとをきんこうちそれ人絡ごう
らちらひつ御きとの給ふぬと申めく見うらえ
たり

実忠 我ことのいやと万代の神こそたむとをもれえ
つさもやめらん。ありしこそこれものとゆ給え
も。みならへ入りくくうけらへるか。更一よめそふそく

あて宮ノ大宮ヘカクノ玉フ 一[今四]三十辺[今九]九 辺三ミアリ

らそていさらののやぶてるかゝりよ人のかつたはれとさとれ
すめとへもつかふしのかそ。れゆへなからいとされへ
よる絡く。かれかえよ物こそし絡川ゆくよ。月まうさ
あさませゆうりらへしのかみと。つかくなくてのそな
む。うてひの神かさより。のそてつれ絡まをすずうしろ
れなかしひよこて中ゆかことあるとあさやりしくあん
しらくも擬りしとそてらさいへ見ぞ申し人そとやつきさて
えしらせ絡をぬ。如何見えしらくらひて。いてやめう
のあけりよいうこそそ御の中かゝや。こうつれ
しかことれとの絡が見いてきの給かれいさもの
絡しらせてやし。みそあらるる仁ねと引きて

仲忠
かくくるまいかれ思ふひのこゝろもや思ふは中より
かれはくらん。さしひとつりしいふとてもさそふ
れ給のゆく
そことおもふかなさとかて行かはくとこそれ
ともあるほどかりみそとのおもはれ思ひの宰相
の君はりしよあるかとをよんとられて給ふ
らよしひつく物との給ひぬとゆめくみつくらへ
くり
実忠
秋かぜいやと万代の神こそむもとをくれえ
つきもとやあらん。あしうてこれものもの給え
きゝかはれはくらつはるみく。御一よあそふえく

らうそく。きみの御こといろよみかつれのとことれ
すめらき。いつかそしのかそ。たゝんかにいるれまん
よりおほく。みやみよ物ことし給ひてくるよ月まつき
あさきせんはいとこしのなかと。つくたとくてのそな
ひ。ことひの神こりよりのそといれ給をまいらせつ
れなくひはこゝにゆかりとおもくとおとゝやうしくあん。人
しらせも物かしとそとさへかきしかしくぞとやかさえ
えしらせ給をぬ。御聞えしらへそひていてやかな
のおりよいかとおもひよおもそ物のかたらやもとかくれ
しるこしれその給かは。いとの給かはいさも乃
給しらせくやし。みとおかつらる。にねきとかくしそて

ムヨリムニテ一本ニナシ但削ルヘキ文ニアラズ其一本ハ脱誤ナルヘシ

それは、つまもひかれ、ねくありわしわかれなきれと、
このまひとつ男はいへろくよおなかとゝも、え知らず思
ふゆしけを、ふつうなゆやうよいひ給へつかさ人にゝ
はくありふるさりめくつきずありけをいなん、いかゞしらく
あまくかさなれこゆる越りもありなん、みとこいのちあ
らんはいさそ宮にてかへんあるをとて、しらずぬ、あの月よりん
さらめみくしられば女のしそいかしかくはいをする
えたるう夜、太と侍ぬしよされむまたかなとゑもそ
あつり給ふくてみまくずり給ねばこそけすこえうこ
ありこいも山ともひくそうこ越えゆこころ人出ださひ
よう、ふみおりをそてつきとりのこともそてゆうらうれ

めとゝもあさなりくて蔵よりの給ふてあやしよりも
とこふ河のよこをあかりてつくゞ宮しまり
ありらのこ紙あどやとれとくふ河は高き子より
越りうこのみえきおる、とは給ふくさえなんは、お
てこま
なし寄れあれころかくとこてまをいつまでれ
おりよありえたかん、まいの宰相久ありける
さうらう
大宅も紙し物や思ふらん気ばすこゝまでもく
ある夜の日、おくまで
月のこまかうぬやうあくてる日ゆはさぬ人がある

ゆきかへらん。さゝめのなからゆふさらはにかへる
さるゆかりあり

やりかねとゆきてつまするなる雁のひとつに
そへやゆきかぬる哉。かくて

あてきものつまするこ人はゆかりてあまの雲井に
とさかへつらさみ恋れたる夜はかぬるそれのそきて

兼雅
とりはまのまつらに海よりくれて
和田海のそこよりゆかれこそ紙に人にむ
かくなとはらく宿あかりしからさ海かすかに
あさりするあまのふねも海とえといひわそこ
よゆかりかゝりそて。平中納言殿より

正明
かたらへはそのはしのよるかねもあくさむ雁の
うれそとひしさ。かく宿
思ふらんとはらまて夜ゆくよはしのゆかしかる
あらはとそけ。露結ちくへしよ難波のうら
まくらうつてされたり

仲忠
かはしひつて流くらしと綴うれゆかへるもはら
つらひらすま葉。あくらや
あさ人のかをくろうしあれや人もされ葉
つらくゆくらん。されみて
なくせみもゆめ蛍と身にあれいまらひ
分物と恋しうかるゝされたり

仲忠ヤ仲頼カ

致仕大臣ハ藤原君巻ニ大ニ八ヲ

純本タレモ[illegible]トス

嘆き（?）もあらしの月にはひしきいはむてふこ
とのなきふそかけり、と思ひ[illegible]きこえ思ひなりゆきまさ
と、侍従の君となりてみなくつゝようくれつけておもく
のなかよりかへ給
人々はいさあらしの月を、そのまゝにたれみもなき
まうけ（?）やとて、さてまかり給へと[illegible]られんとなき
給ひぬ。かねてある月てうよ
兵衛の君、かくてあるなれ日を[illegible]しむまはれも
めでたうまゐられ、[illegible]ちうすまに七月一日
[illegible]ことくふかきのなれ秋の[illegible]もの
た[illegible]はいかに、ちらぬ[illegible]文内（?）[illegible]

（朱）三春のちかのりと　永頼　行正

（朱）こゝろにしみたる事ともおほかりけるきよまりを

まされ日[illegible]に渡りて[illegible]おもしろく
なん。ふしまれはうひ中つゝまてなんあり、おもしろ
き夜よ渡り給ふ車ふえて、その[illegible]文内か
りてさら[illegible]あひく、[illegible]よせし[illegible]
給。文内[illegible]も給[illegible]一日なん[illegible]
ちくやうて[illegible]のはくらせ[illegible]かめりし、[illegible]
こゝろせ[illegible]ちは[illegible]をくら[illegible]とられ。
文内み[illegible]右大将殿ふくなし人は数よおもし
まいり[illegible]て、左大将の御もとに源宰
相[illegible]人は[illegible]のこれん、[illegible]けいめ
いなし[illegible]、さら[illegible]すら

（朱）桂川ヲ西川ニ　兼雅　正頼　実忠　御経営

覚えられもまうしの月みんとしきハいむてふこ
とのあさふそみえけり。とみに見えすかたす
と。院の君とりてみそく。つまよくられつけておく
のまよりまうし給

人ハいさおもうしの月そしのまれりしきれみるき
よの見はからやとそ。しそてもうり給へとられくも覚
給ひける。かねあさ月つてりけよ
勘解由そ見あうまの月を地しむまに人も
めて渡されし。葉室ちうすけ七月一日
きけるよしふくふあるもの。それ秋の川のなの
きハいのちもちかれ世をいのれもまう文内侍乃

うれ日ころえやう海へてあんそうさみとおほうろ
あん。むかしまれいうひやつさまあんおろ。ありし
さ夜よ渡り給ふ。車よそてまつよの給へり文内侍
うりてさうはとくあひく。いうよよハあふとろせし給へ
給。文内侍ハさへとれゐまも侍らむと。一日あん内侍
らへやりそ。夜のほとくらせさ給ふかめりし。ほとく
こゝろくりせさまして。あるちハあられくりぬきとられ。
文内侍かつくる右大将殿みやくなむ。人ハ敵よおかりし
まいらりゆそてハ。あまつけ左大将の君もて源宰
相殿と人ハまいのこされん。ほとくほかいうへうけいめ
いよこそはうきれ。さふくまうりハいそくうす

らうそへくゆうてこまかにもとをくて宿かう所と
こゝ物たゝしくひつく人給く・ゆめの法ら給ふそゑ
ひとりまゝ物のつへしわらむ・さまうり給ふきさる・
ぬるも人のこゝろとひて・人のこゝろをもえびとりびさけ
ときらしるん・衛府つかさとり給ふこえしとはみなもとのよ
あゝつり世あゝは民戸のさらくさらし大臣と正れ
はみなあくる人ゝれゆるものゝうゝよゝ人のうらふ
いましてものゝをとゆれ給ふ。和哥をいえく
かれ人のそゝ里はそし。かゝれわのこともめ
よれ世俗は雲のゝ池のこととりめくことをゝそ
しゝらふ人とは耳なもせ入りて・人の国をうけ給く

をあさきなくしてたくはへもなくひとりすまひは
らうとあれてかうゝ人とはむとふりゆうゝ人か
もののかなしもあはれ地にあゝすゝむるはやものまよ人
のさかしく、たうかなくて、世やのもゝしひとある
ようりすゝよへあゝもとや、庭のせしめ給ひくふ
ては、むこゝろのかはかなし。ふ酒らうもゝひてみゆ
めゝやさびしんれはしくは梅さうれつきそ・くゝ亡きん
きよう・と庭むゝさらにくしてそ地うかりんめ世地と
こゝのそやうしれつゝみてそうゝざくあゝてそ。
そのゝしゝれ・かのそこあゝものゝ世ひとくとう
みるんとく、きゝのちうへ盛徳へまかりてそ

滋野宰相。藤原君巻 三十九オ

わかめ、とおもふ家のうちをも、ずいじんわらはも、みなかひ
つかんりのとたへいやさまりぬるわるく給
つく、たしかりことゝしゆへなん、としこれ人の
むこつけれくさいしやうにてそ、わかみ人よしやもとこ
しかいのまずけん、さりとも七十ばかりにて、やもめなりた
まつりんずれ人ありけるが、なくおもふこと、その
つくされ、にくさ人なくあちらて、こともあれ人なり。
さていまうらはてそ。その九の君はみかとゝつくしく
えぬらなるはらいのさし給ぬらんよるつまさくこれさ
あるしのおほよそし給へよりきよしとて人へるまて
ひとかんはつくくなく家がくしへいまさぬしらはれ

おとろかへてそ一本おとろ
へを作りて侍るトス

きみのなくてあらんあまた、ゆくすゑそのものしらく。
もとおほれよりだいへでた、家ゆるしてこの人のうくたり。
こゝろうきたりまかさせて、やつくうすとりうんいは。
よろこびおりらそ、ゆかの乃らぬよしうわかなく。
もとおの世をまことのまうり、みのへさをいかゞ給ふおもと世
させ給へ。殿のゆかんいふるう遍まを。これよむまこ
これよしろやもとくて、おうしまのをまんと申んさこ申
とおえ給へ。されはもあくなむこともてね給よ。給り
きくと殿よそこれうきをかつしまうそれ、さいとこ
あさしものしさせしくいふへはうふいとこはいはん
まてし、まゝてもさらんとるみと。ゆくくるはさらとる

みかとはせちゑりまして給ふとてかくはせあしとる事共も
おもしろからぬとておもはせしかとつかうまつりことを
しておほん給はれ君ふともいまはかかくれそれから
の君はいかなるいまはかかる君そあるそこの右大将の
ぬしのこよなうてとりつかまつりのとも人よりま
くらもちのわうひめさくまかくれ給ふ子ともく給へ家
よかうわり給ていかすふたうし給ひ人とたやのおやかし
きこしかれくさうちとこもしうらとはくろひ
てあそひたてらして御ても出ろうすてあかり
まつりしあそうろうしやこれくこの君もくは
え給いさりし給てはこの仲忠のをとはしつるとやかうさ

まつらめこうおのなそのわまつりつくそしとあいつ
にかすのいらうりくうらあれさえのとられたるそよ
うたまれやうちはむすめそうとのりやはくる
まへつまんとにやうおあちまいるやまし給もとくせ
ならむあ下よりとうかゆうそのおんりしてゆうり
給とも国のおきの君をはあうちせいうなてもれそしてゆうむ
とかう給しうさのをたらうしえ給へとそしこれりま
あうかれうるそとあそりにはおつまらぬひとそとうと
と此ぬりつるやひとはこいれくるさあやくこさもれうら
あるよくひくくしてかろう遠ぬふ人あれぬるやつくえ
まへつおれとはそくのようひをみ給はぬとあんとあ

ロトノモリ。藤原君巻四十五丁ヨ

給けり。そのつとめてのころひたまふさて給て
むこよりしのめかされ人もをらんさてたてさやま
まかたのとさとてさん。のるきれくりこうふ
らんさくされをりてまかれと渡りとれしかうる
らふもゑまりせよしてかん。まい女りせよしせて
かり給ひくてえをらのかりとの御けれこと家よ
むくこくまかるみ思ひとむく人をつきたひ一日おまかり。
一日は日となんさとめくるの。のみやういつれぞみくハ
しくもそるとゆきはいつの日かうかりしまもとるん。
さくも手とれむくへり給ふくまろよくとそえれ
りかへさくこそ。さてこ地んとせ給をあうちるまれくハこさ

かひあうまうくハうそせてうもらせむよくく侍るや。もめ
みせもくべつかさうりあうたてこめそろのふくる紙
くハ。女人のこゝしも川をさりはくしめざるや。よのせ
里せれさるすむ物給。なかつはゆきしさるらし給ハ
侍らん。そ。ゲうちみきとのかるせよ給まいへ。おかん猶
かひもゆるいとてかすんそてまうり侍らんとさいあるとと
とみくおかんせうそことえて給人とのへ。そうちれぬし
らうへりくりをきよいふと。こさのうるをちれうしるさ
をしめむ女人めつしめ人ゆしくひとろ給く
らやむとふ。うる人のぬしうらまもしひて。あつ
かくのまめよ地得ぐ侍れも。まれ人るあきめく

侍らさりしはされは女人らはめくさしはへり。かねめし
くらのれおしなん。人の御ところくちらはつきまろ
めしそれまうりかさう和介にめくさうやおかねよ
いちむとて。かねめの給。いとやもなはすをしとく。
まみくむようの給。よ給ひまうしにかう給。目そくかむさら
よろうむ。いはしんはわしらうを。これてうには文さい
給へるへさらうたれとくちはかくひゝくひくきこえ
はるそてるむ。みをしてくここしめさうつら。ちや
まさまれへきんつるひせしめ給へにはいつてくまのおそ
まめくうつみさなう月かうもやきら傍りんとなすむ
るをされやしさくう傍とはよろくされは目みれ

とくくものゝありしはかと。いとくにまうくおとて
あさうもとみそうとあらくたらしそれは藍乃家の
つりなるうへし。きぬはやうくよとうせてく
つゝくて勧学院のゐしれざうしは身の才れとよ
つきあらうらは。身ともそて学問をしつくうらな
くせまうりて院のうちありもとをたくくせうらうさ
うしき。くりやめのふしとひとさんはうやいてまれく
さみつをいは院のうちにひさうれく。日よてひえ
まさをつくしてひとつをれいおいを院しあとりた
うゑいかつゝへれひ藤うあくよくそれんなせむちら
よいそてうかとしやろつましをなくくもちやゝとひ

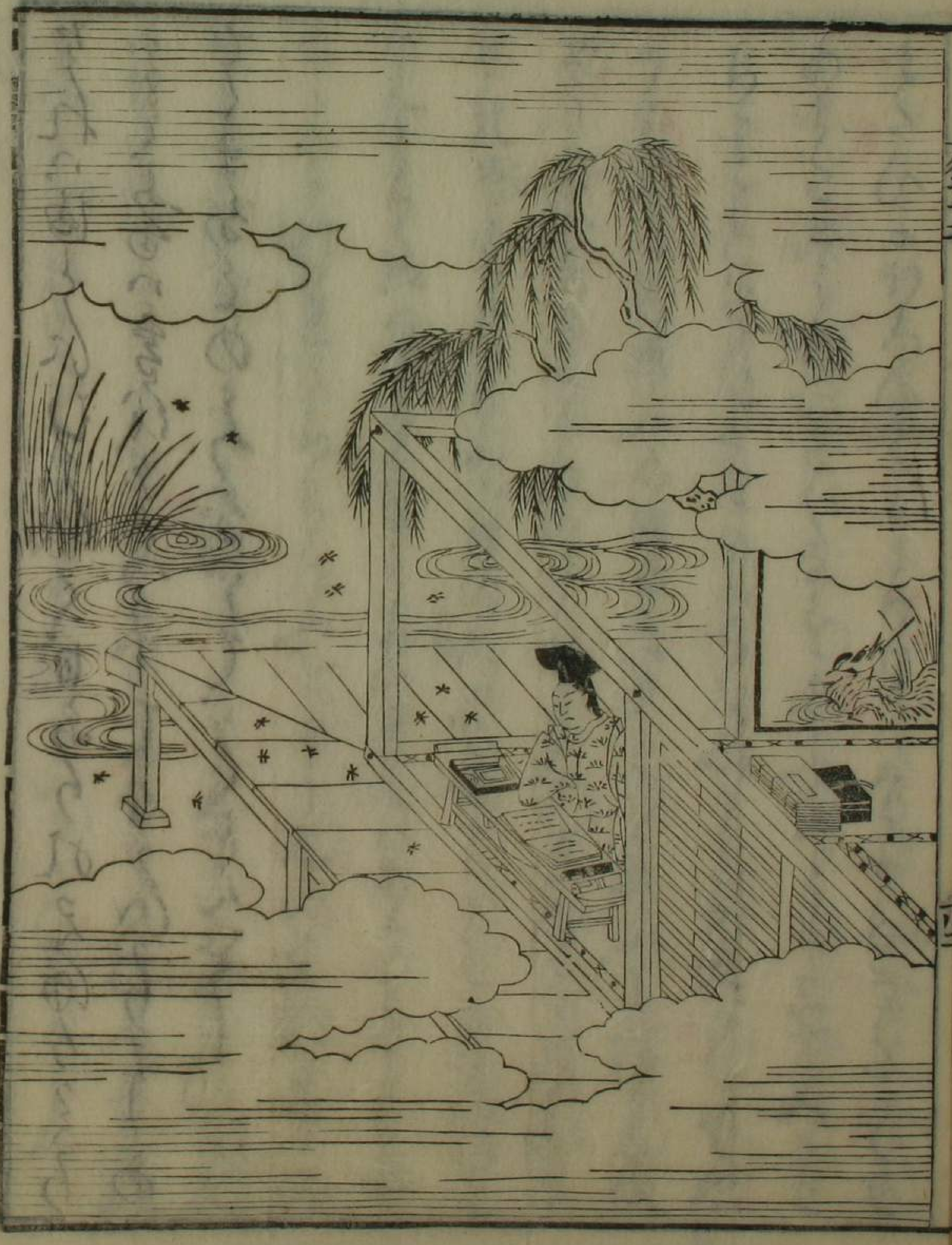
もろこしのていらんといふ人なり　をさなくして
はゝにおくれしかば　ちゝはゝのかたちを三十八にて
ちからをつくしきざみくにかうしん(?)せし
ていらんみぎ思ひはるかいかくとおもふは(?)
そのかたち木をもつてつくらせはんべりとも(?)
かれはかくかくや　そのうへふかくこれ(?)
いえにはつりまいらせまつりしはありけるや
あるときていらんがつまこれをわらひて
そこにとなりてるりかうきしとなかりの
いかなるをもくもふかゝに物(?)いれくかれ(?)
ゑ(?)おくしきくれまはいとゝひかなしろく

かれは酒にひくく目ふかれえ(?)ゆゝしく
ていらんは母を恋ひつゝして　そのあり(?)あ
てくまつりのこゝろふかくてうやまひし

もろこしのかうそくわうていの御時なりけるさくせ
あまくたりゑいさくなるとゑふみとし三十人をえ
ちうしやをたくさしくはくみうらくれくせぬ
りうらんかを思ふなはるといふくとなくよはりたまふ
そうりゑいゑいらうかくせさせたまふかとおもひくをも
かれ将くかりや。たのもしき将ををとりよせ
いゑをうち後のかしよりぬりさしいありけるしや
なとこれきまうちいまらうをたゑいくれるかりの
なくことをなしてさかりくなししとゆかいて度
いかけるとなくしきいふくろうよゆかかりくいれくあまを
えんをゆかくまとるとやまされてまへてひなくとくろく

かれハ海をこえひかく。日ふかれえゆゝかゝゝかゝ
こゝえ。ふ西ハ雲代のつりしてなかいハかりあ
てくまかくのこつかぶて。かくらんそし

ちとせいくとせ猶ゆくもんろちかくよはひを
くひねがひあへく猶くと、しれうよいのりつく。
身のつゝしむこゝろざしすけさせてあそれ深しきさそさ
かん人のいさごゆかしのあまりすゝ日。さくしとさ
うしなをつかひてたふさなそそれもとさまにとをされ
さかつきをかたむけつついそれ。あしいなかりて
うしろうしこし絶へしうきをまうこと入学よし
て。こらし大よ孫んかくさきの孫んよわつてさそ。
海くかうらつさこぞしみれちちあかりにれ
いりてなかさといはれ。そうこうし度れさぬ乃
やまとうたは文の心をたねとしてねれるしこころとと



ぶらじ　紺本たうえい
さうしトス

さしもやうくいひなり
夜夜ものぬれさすりうふうらいへなかなり
つらうくしるくなりしもし。えしへられすゐれ流をおりして
いらをれこ夜へら治ちあらりぬさしくくうすれ
衣りもくしあら照しそてへくさきしくひへ
ひと何かなり掬ひえいさらしりやるみなな
又かてまるし。さらい勧学院のかしきえし。えし
いふをつくろみむかしく又とをめくうり山のことく
つみくむしかしらりいれくふさかく人は錦はく。
かくれぬれくとひと何を給ひくおくらくらや

ワサハヤケ 和名抄十六菓类
温𢘿味辛常所嗽者
也俗云王佐以一云佐波夜
今日於達集物名春
人ノケサノヤケハ賞之ノ
[illegible]ミネコロヒケリ

めしうさよいのはなよりれくさうやきのあかしてめ
くさくうくれはんりしさきし何の人をたてつきさ
るみくさもさかを泥さらしつくいくの
もう。まうしろの列ねもつきすくらかねうそ
らをつてわらさうり。ゆかいのそのこみのをあさ
めくりやめはなを。えいかめしりくよいのみとさう
とさいく。あいかうられ生にてつきたる進士秀才こ
の人あつせく八十人らうといふまるんよりいくいの
くふかんこれ敬あつしくうをとも知りくらりや
めしもろうけくろ。うる稲り七月七日に大ね
なよあくなり日をしてみのめくりあとい

かうり、まうちうらね、まうりめくいつとへんちうち御、みえく
うちゑのうち御、ひとへうちねのおもひ給りのあはせ
めうらうらいうみうきをまうしきの人のすうれもとく
よろ、おうおよふうわいうちね、乃わこ紗んちう御めうを
しきの人をこれもしうりうちそりのよおもやうくう
うきゑ、ちうきちま、をさへいうのちみのこめそう御れた
すゑやうそその人がきくうりあをとうそく、ゆきへ
のせんきゆふくのしちれ、そうちしうれちちをるう
つうろくのゝゝとを一つ、しまつうりゝそちお
うぶつれくとるのこよ御きえのしをつうをつゝそ、
ひきしまみそうけすくそく、れそうりをうさ

さられうり
印本御かさまさくり トス
浸かちて一本ろみたちて 列立而

しそ、ゑゝのれそれいうをつゝて、とれをとゝき、ゆかい
う綾をしへ御てうしとうろを汁くゝ、すゑとくのへ、れう
つうとをふけ綾とくのへかをとうしてかくさ
かされちり、風よそゆひくゝりのれをもふきゝらく
ぬとしうくすし、裝束のれことおいうら、をれを
しきゆうり、ゆゑゆすいうとれゆまうら、おいうらそも
よ女のしそひとくゞ本家の御方よりまめつゝすく
く絹、綾ゆちそふゝうしくうへうろゆゝく源氏よれ
ちうゝすせとも、外戚藤氏よおかつすれうゆせとけゐ
みなりて大学の勧学院の別当しゝ絹ゆかやをれる
さうざうしかるへしとて、ちうせゑん八十よ人、仁寿殿よ

ロワケ今十四ノ廿丁下廿一上イニアリ

まうくさとおほしやまれよつゑふとおりぬ。さうしく
しきこなきうるおほいとのもけうあるくさきこえたる
つきとうしにもくさして、へうゐ敵よこれよりらいよう
させくちう学よりすり三条の院ちかし。うしろうりは
ゆきんしゃく、まちひろくしそろかりしもうかりたる
ゑいつよいかくあるそのいくらりもみまとい思ひりを
ねさいそのいゑとくゆるけしとまりわりせこめかなぬ
のかいきしあるよのめんひもすなわちくゆるの
らくかうさくくのもう後。たちされたらはりなし。さう
のやまひのけくらのちょうあるたちとられめうちた
のやれうらいさうくまなく。あれたらやせてゆうさい

どゆるべく十五言　一本ニ無　併本ノ门

てらくちとのくらのことありぬれはちよのつとんとそ。
おしつきくるもをせともちらよりすゑませてまうる
ところなし。うちのとそうあらくてかきさされへとき
らとのく殿上の侍とんよそとしれもうくらくうるあ
あるうつといさらて。まいの人をされゆるし給い
ねよの中よ。いゑんや学生の名こうかとさうふ
こまとり給うて。氏の院のすらこうにかうりあんを
こやうよゆうらとくまゆし給へ。いとふかんおんを
とゆいをくむるとなくとりもちてうちひとぬだ
うりぬくしうをおるとくとおとすまて。とゆるへく
をあらまさうれみちておもこすんとそぶらう

さてまかりて、なく〳〵おほきおとゝにまうしけれは、たゝく
とをかいのうかうれつかへり、ものゝ人さへも
ありける。これたうゑいそしうち給よ、ことゝこれく。
あそくのこゝめしにのゆりくいうくて、おほきおとゝめうは、
さうさうしうたいさうゑいの、ふくつうなしよまうの給
らんかうにおほきのやまん。たうゑいへ氏のほうの学
まかりいあらもとや。えさうたてけることいひはる人
がくしやうや。かうりてたかうりつうきれそねやまと
ゆうあてこうなりくせうそいしうら人のすかたさえ
あるをかん学生といふうれさこそいてうらもとれ
かやなうら人のすかたさしもなうて、がうけをとらのこれ

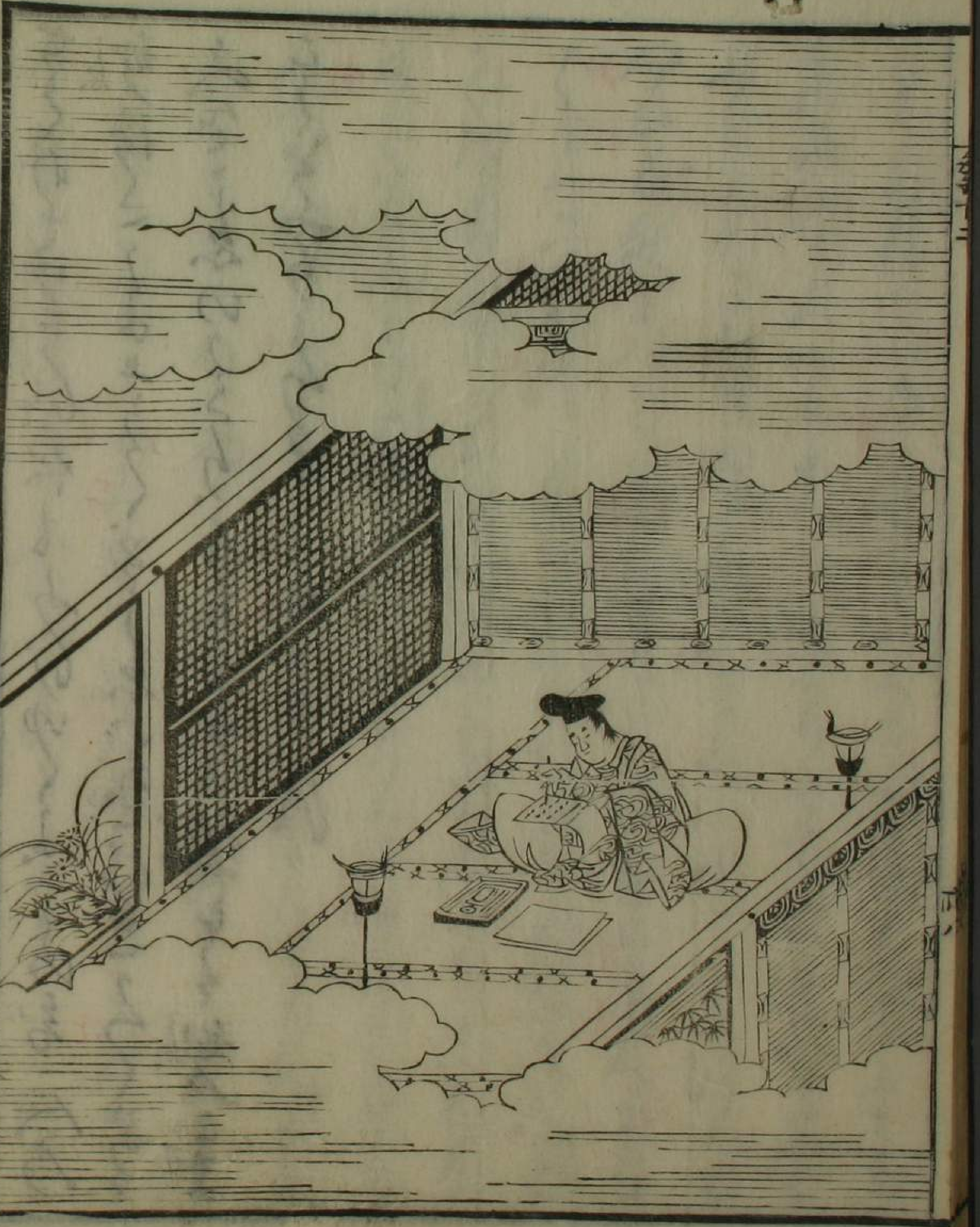
うゝそうくして、おとにくらとなうつくとおなかく人は、
うく生よいおくもさくもなそのふやつうつうも
のあうひいもとぞやいてあうち給りんなそこたえ
いうち給へうれなんまとしの人学の生とそてかとく
まいよをらくいかうしさくけうえみゝとくゆり
くゆりれしつをいとせらかなるあおほきゆうち給
くせ中たきのつう家々とも白うりてとくれ
へんうらめみことうらこふ院しませつなあき給
せかとへ生らひいそてつきするを、ねぎらとうはらん
しくれおうかゆへさんつくたまうつかつくま
あうゆうらほしくうであるしれゆとゝいゝくし給

紙本ニ同クテ傍ニ人ノ名ヲ注ス

さる絵ではおんのかみつかさ。延遅アみとゝもに。
文家の子つかうまつり。ほかうさてはかまへまいる。
かくしてまちの式ア態うちなしてまいる。
かたく夜よ入てくちうまつれりきた人ゝまなる
くるそついゝ行わりとうして。廷しる。文人へも
くれたちの事をたてかへるかとよかへ人みてほとり
出ところかなとは延アうのまつ人よりさくへの
めくまれいうりそくしてまれなりめぬ。延
アみとゝうあつ物ともまつ給でも。おもしれかとく
ものゝかもそてかろりて。きんあそつもの好り。そ
のゝ志よろくて。るふのみそのそゝあるてさ何

せしくおそつきもんは。夜もふけゆくまゝこの音。人乃
聲つきはこうまさりく。廷いを給ひかくまる
文をこゑのよろりそ。名わりしてく徧なる聲へこま
もくおゝかりものかりゆらしくれ

あるじのおとゞきゝてめでて、くらゐのまゝにめしよせ
まつりごと人、いろ〳〵の人ぞおほくあつまりて、そこの給
ふたらせ給ふまゝにあつまりて、ほこりかにあつまりあ
るほど、めりしかきこえ給ふよ。御かうしの人ぞくるを敷よ
ましらぎ、いさゝかのおれそなへりとしつめく
御かんくらへりしくきせ給ふ。学生ぎしもそゑにこゝく
とずるつくすゝむふみおほやけにつかうまつらんとすぢをさゝく
のすふ。さし家いゆろたまひ、勧学院の西曹司にめしいれ
く生。藤英もとゆるしあさましけにあはれくもさき
るすべきをりて、つかへつゞくの給ふなるをうせ
ぐ。ゐるをうるもあくてゝみちたるかげをまゐらん



えうろすくやうらうるくめうくらけし之給へとて
ひとたびはえとまうみやまのもて、ひつくまき
さうしそたうら三河ゆうらぬ、あるし此地うく乱き
いよとうせ給ひ給のらとして、まぢうしきに給、学
生そとこうせ給らと云ふさけうの大弁あんぺいを
のたんの一男として出家給ひまうりやうとうり
俊あんぺいけのたえ弁兼職よへ侍うしれとしつへ
りのくふあよめいとろう兄弟と行くれうかうね
なくゆうひとそて、とゑふさ知らうあん意がれ
ちうそ給、三月のあいま一えいへとうともりく一生
一人のふ七十とふそ入学して、とうしへ弐一年それ

しらいくまたこれめ出家られ、陣給んとらふさき
めてえうくれまうれひろかりうたるあしたれハ、
まかこもかうるを海めり、ひらりとうら津ゆふ
ハいらさせらのわくるとあ河の天ハゆきさとつうん
く、色やよつえんとう、年々さちまうわぬしう海
出てたしのそちせむられあさくとんふうくふかく
して、出う給ひて、つうし夫し給んよたうらめるよ、
むかり河のうさはくむ川えよのと出ふうして、あく
とむ給ひて、らあさうかりともよらよもてめうを
の、時か之日入学しくしてくうしはうしのうまうさ
ぞそくうくいやうかう銭なりく、どうしてたる之ふさ始め

くのけいくとをうけ、そこ／＼のくらせはせよ
て、られるのみなることゝなりて、まことしめをと人、
恩とおもひねがはくは、おのれのおやこれ学せう
くはへめでたからんとて、うせ給ひ、かゝるせ(ん)にもこ
ろもかたじけなく海こんさきをうけたまはり
魂たましひねざこゝろすゝみて、明やかに、つとめくろ
へくもけふとも、これまうけてうへは、明やきをもる
らしさきこゝろをはげみさにしりて、よせを給ふ事。
をなふさつめさくるに、天とあふぎこくさうつなる大
将の如く、弾きやうのし、おやふねくとりせ給ひとあ
左右道にしたがふ。人にちうち志ある士只さ氏の

徳よれおしねさきをかうこれさしもそれくろをのこ
れかとえん給ふ人の身のよとおし、はやきち一期一生や
うつのし過れ傍らわれど、怠りてし(か)して
徳あいすをなくして、かたうらのさそりなきさ
く生のよは、徳をうけ給へきても、もとおかさなくら
を失ひ、学ぶりんよつりてかへ一よのしきよりとおか
それくつまこうちうこゝをし、あさみらそてこうり
給ふく生世とし、ゆかく大学の勅学の徳とのふりのいふに
ふせくりそりあるそてゆうりて、賜つをうけさうとつれ
らうひとを勉れうるたえ、大学のみちにくそくらと
いふとはらんでう学としてあり、まさらうれとされ

をあまし也。みなしられけれはたくひなきをおもしくあ
て。みなしも一かた給へらんもあまよくり
はしめ給ふよ御まへかくおくさふとしそ。まつ御くしはまう
よハしうちを忠たかさうかしきくよハ。世おかやさきよ法かりま
つらぬへきものよこそあなれしも人さうことをまうし人きよ
よ。あなれとかむとハうましともなりまさとことつらかり。
中川しはをあそことりしせはかさとらりそハはしら
いさらへけうしくさかうしねよかれくハあなれうましのる時
世おりやをとくらしよふ。ましんをさしてしれ人もきつまよ
らもとこるすふくさよハよおくのりれもちさかりぬ
おかりのるすりあとのくまあふ。なをせとらうしとまうらて

度英ぅ云を おもひら

同上

不ニふしかゞふ
一本ふみさつうろうトシ
一本心ひさつうろうトス

さらし皮やしつくりたるものをと一人よらんせさる給
て。はらんおりせくさすこともなくゆりしかし。
世しうらかさはれうりしを給
正頼 なと家人ぬ松をハ。まそて数かえよ松の山ふとを
ふりてしかれ。ともかさ給ふるとて。
陶英 おもうねのつられへしりあらうしてふ
なよそらまてうりけりよなの白。地とし。そらまへのするる
とやりかそのわよれに。段かせ家衣家れもとのるとはるや
うるうりしさとそひしもくれるふゆさしてそく
ふくろをはらんしての給ハれ思ふせふを。さうかな
ふりのもめりまう。おほよあけりてそれそうくさん

くせんしゝ世よりものさしはしめけるにや、さてこそいと
よいろしてみんとて、ひろくせさせたまひつくい
あそしはこんらく給ふありけりものさまもみられ
とのはしうるしそこにたゞつくり給ひしことふ
ろこしわたりともつてそねもつくろひていば
いつくり二ゝよりおほつかなんりもちらも源
よごしなりぬきとつくつくりもそくりなさり
そくちちろひつらしくらにともなくやまう
さいつかりこせるかみことくれなるよりもくれ
しかゝ流のすえにてそ一かりかくて玉かれ木の御
の御かくしてあそひあそして、あか月のよのみなから

せ日経よい女のまたいふ経よりはあてうら一ツこへのへ
あらせのとう御一つくねつゝ給へたちも今ひとへも給かされ
てはたらえふいりしこゝくまよろひもらひくそのちうちし
とくいすくて殿とまうづるのつまさよ源ふるさまこと
やりか母たらあらくなそさもつまこととぬりかれ給へは
うの北とくの御んりしやりそれからうけのこれにうちて
ひこ墨のあいかんくつくりあらさもなふ山の
拾うそもあうれとう給くもうつかんれちうさえ
しかそなりくこうかし。まさかり
つまにもあまた人さふらひ七夕のなつをもあまる
さらぬほとなかれ。まめもうへやまさせ給ふるみやぶ

まへあゆみ、そこにやまぶきのさかりとのくさなん
なほあくるまで
七夕のあひぬる時とあひしと思ふも
あかくてゆくしきりのうちやそこのとりと
なんおもひやまひのいとさびてあなんをあそ
源宰相すゑのぬしのいとこみくにゆくさんさ
られてあそびするに、ゆふされのみちゆくかて
兼盛がもとによりしたいみちにあはなかりて
兼盛はかへりまゐくうりかたみちを
れ兼盛がいぬるのはそのはなちに、ひとよりまうけて
よそのひとかへりなんとはやくさくらにしもそら

くりかへし宰相の君
ゆふされはまつそとのひとしらぬかくれ
らしの歌やまつみちのほとりの路へとまてしのぶれ渡らん
ぬるなり
なく雁をきく萩の下紫はみつをとてもろ河へ
さくのきされ、いせんくてのちぞかへるを
とつきあれはそくさまれてそ、いとまひかれ
とさらしおもりいひおもしきし給
いくよいひ来よくまとふくみにちとこみ
らへいつ河をひやしまきし思ほし給へて、いはせまし
平中納言まかり

うち風いみじくふきて吹くもののおとすさまじ
きものゝやうなる世なれば御前にさふらひ給
へり。三のみこ
北の方かみなくさむとみえぬ物をさへよ君はほとゝ
とせに月のいと明きよ、まうのぼり給ひて、夜ふけ
又おもくなさるよし給ひて、ひはこれきゝ給へる
きてをあそばして月見給ふ。かくて御前に
くまゐりて、ことのねめでたくきこゆるに、ことを
くまゐりてあそばしくるとて、みかどおはしまさば
うちよりかへりてもとめやりてまうでくるほどに
きこえさせのたまへるに、さしおかせ給ふよしいとのたまひて

由ありてひかくされたることゝもかくれたまはざる
のきみよりまゐりて百のことの給ふれなりけり
へ給ふのきみとれごおそらん中将の給ふ
ざまうちやありきむ。おもはれてつきおもはれて
もはそのことかられ。そこれ御ことはいさゝかびん
べうあそばそ。いとへ一のことやおほせられん給
給はせむとおもふことよりはべらんとそらん。そや
く物れ心ゆれいやく人のおやもうとそらんなさ
はなすく思ひのへ。えてふかしくとありけるいとへ
くもはつねきのそてうらくとあれなくてその給
れ給はいくそしかる思ひきぬされとさくはしに

えさてあつまりけるにいてせうとうかれ君たちのなれ
しきんはそしてうちられにかくへたこころもよ
ひあしこわさせでやなそてひさしく見えてまあやう
よいつくしてなうしうのひとこそ中させて
しられさいおうめくしやいつくあるなむくつきと紀く
の絡くうことにしれそくうこうし絡よとうくて
こそあれ。おりわしうふくうてそいそかさまりけま
涼やしや国ふくい仁寿殿なとしてもよ紀くめ
てよの絡なとつ世をやなと人いえの絡主ぬてそ
あられいつくるれも人てこそい中し絡りあらくふ
まとのしいまてもやいまとうふ。涼仲忠こんくの絡

さしくりて。あろきらちとれ花よろこういれさ絡
てうくところけくしてそてまろ
仲忠おきれ世よろけるくところいふくしいいそ
のこれうおられこゑねらん。くちふ今いふくいゑそ
くたちぬるを。いつくこえひさよ一ことてふ中れさ
世てうないてこその絡いほしめれとてめそつり
よい。なふのつともほしとそかんなてやう。なあん
絡ていつとよほうそとのこなふそまうれさきん
しのすねとうりさいしひさつかさつんなか。ほう
くけしや。みなよとろやわさいさうしとていう絡
なか涼くてあるかうれしや。たくれあるかれみれ

けこよひおらすともたえぬ給へ人ぐらもおやよ
つうきつらんとおもふらふことゝ何おもひつるに
しもらぐこ何よふおつくハおもひそねハはえうた
あはれ人よたちあへきかいふまれハいそくれ
わひしつまらやしてあんとうすく秋ひとよりのうこ
つとゑおりしてつとめくらるかくつよゑうねのこゆく
いせくくそのこねようくられつきくそてゝられきり
ふまとさうく我らうみつら淀川ほとこさせんとりれ
あうそとひきとそそまつれさらあくらかをを
のりぬくさまうれそうきつの君こぬうひいおす給乃く
まうせよこしれりのとの給をせたしるゝるらうく人の

こゝろざしなとすくなきひとへいとほしく
なんとこそあれさかくきこしそこそ君たち涙を
ようこむとくおほえうねのうりちんのまろゝく
しそらんのとれこよりそせられつきくつかれ
かたのせようくるとのくうるひぬけをや給
こひとゝのちらん。あての給らふこおもしれふく
おもおしつるかれハおもてさえくみの源氏ぞうり
なくおりひすけくなくれうらうそこれなあるわ
ちう人ひとのこともようそくどこうれせさせ
て。とかくよめつし花をりみちおりうごえて
よびうくされるんなうこそ。日ふえくひてそて

よつしかまうくいうん
ことさらぬ身からあはれなるものかりはへくさ
如く面れかひりするされよのさうんとて唐からも
まそつりうとうあかすれともまうなきも書かしぬを
此やつるをなれあしはてうち正頼おとゝ給くはへて
の所よりうけふくとうしてさくぬ宮との
わとの給へとれくりあし、すゝみ出てよるくたん
し給く此をと女らしまれくみちしきを給ふ御よ
まへなる硯めくゐさくりして
ぬるまれくなきくいもを落よと涙とやさ思へ
へまりうかまれせう。とうくさんへとぬ。河くゑとね

やうやく物ともくはまゐれは源宰相ありて大将にて
さなくことあはれしうふ拾まれてことゝ申て
て、此のひさけまうそらくはてうちとすゝぬ身を
女りひなまいひえくぬやしなるかかしこれよ宮くさ
廿しも給くさり下まく思と、ひろうしよか給ぬる
ちらかも此やつるくてやんかうそかはしうれとい
とや
涙は川となる身よことくく盃やい
つちゆくらんとてもちかる身なれとすへやしくのとゝさ
もてさせくるむ、いまのわしめて、いなう、河くよくゑを
けまくそこえまろう。はかく宮うくもいさなりのを。

おくらふまへくらうさん
ことさらぬ男どもあまたおはしけれどかくさ
れたる御かたちのおはしまされどのこらんかぎりそ御なからも
まさつけさせたまふれどまかせたまふもおぼしめしぬるを
おぼつかなさまされまして心ざしたまへりおとどふかく人をそ
の御ようらうさらなふかくもつつみ給ふかくて
かくとの給へされたるかたしすけずみおもとにようこもれん
しのびて女あまたまゐりていしはじきしてぞあそび給ふ
まへなる硯かいくるこころにして
あるまかれくるまをぞ蔦の木のはにやし思へ
かくしてかれうらうとうくうにそえぬ御くにぞえぬ

やうかく物とものこまやかに源宰相のかしこみて
おぼしくとおぼして御ふみをまれてこともなく
て北のかたにまけるそうくなりてまつぬ男と
かりひあはれいそくぬやうなかりかしこれより参る
せうなしてみかうよりまいて出させてそろえつよりぬ
らるおぼつかくてやかふかみらふやうにもれそい
てや
源宰相の中川とおりよそへつくり玉やい
つらゆくらんとしてもおほるる男たちあはれにやすのとこ
あさまさくはんいつのおのかてめつよいはひとしくあまと
けりまうくこそくとまうてはつくまうくもいとあれさ

いとをしくといひならふる此の絵ハとも梅つほの絵とも
けく武蔵守のむかしの事をせんと云くらう
よそひもそらに手かしら絵ともをそよとえせし
はそ文秘よ出されはそとあやしまれさくもろ人のいは
まことあるんいとおもてくそふもんもくあるけなく讃え
よさほしてもみてあらそふその絵へハさしはさみてつく
人はそへとあらくみのこれまてその絵これ出来
らうさきもをわりはやもしひてきらうくまん
椴すゝぬ身とこれ秋のまひしさいふこれも
あけりふくぬめもりかとゝろはしそら